

「文章表現」「文章読解」における検定実施報告と結果分析 －学生の能力把握の一助として－

A Practice Report and Analysis of “Bunsho-ken” Implemented in Writing and Reading Classes : An attempt to grasp the student’s competence

中原 香苗

(要約)

「文章表現」「文章読解」の受講生の能力を把握する客観的指標として「文章読解・作成能力検定」を受検した。検定結果を分析した結果、学生の能力をある程度把握することができた。検定問題と授業での学習内容に関連がみられることから、検定結果を授業での指導に反映させることも可能なことが判明した。また、検定実施後の受検者へのアンケートから、自らの能力把握や大学での学習や就職活動などといった受検者の目的を知ることができたと同時に、複数回の受検を希望する意欲の高さをうかがうことができた。

キーワード：文章表現, 文章読解, 検定, 能力把握, 学習意欲

1. はじめに

神戸学院大学では、共通教育科目の基礎思考分野に属する「文章表現」ⅠⅡ、「文章読解」Ⅰ～Ⅴを開講している。

「文章表現」では、大学のみならず社会に出てからも必要になるメールや手紙、レポートの書き方といった文章作成能力を身につけ、「文章読解」では論理的な文章を読解するための文章読解能力を身につけることを目標としている。

学生が両科目で身につけるべき能力を、客観的に把握するのは容易ではない。そこで、民間で実施されている検定を利用して学生の能力を把握し、学生の能力育成ならびに指導の参考にすることはできないかと考えた。

日本語に関わる検定としては、「日本語検定」（特定非営利法人 日本語検定委員会）、「語彙・読解力検定」（朝日新聞、ベネッセコーポレーション）、「文章読解・作成能力検定」（公益財団法人 日本漢字能力検定協会、以下「文章検」とする）等があるが、今回は文章検を活用することとした¹。

2. 検定実施の経緯と受検者について

文章検は、文章読解能力及び文章作成能力を「基礎力」「読解力」「作威力」の3分野に分類して測定し、それぞれの能力をどの程度身につけているかを測定し、級別に認定するものである²。文章検は2級～4級で実施されており、各級は200点満点で合格基準は70%以上となっている。各級のレベルは、同協会が実施している日本漢字能力検定（以下、「漢検」とする）と対応している。すなわち、文章検3級・準2級・2級は、それぞれ漢検3級・準2級・2級程度の語彙力を備えていることが目安となっている。

文章検を選択した理由としては、記述式問題の比率が高いため、選択式問題のみのものに比して、学生の実力をより正確に把握できるのではないかと考えたこと、及び「文章読解」において漢字の知識・語彙習得の目安としている漢検と対応していることがあげられる。

そこで、平成27年度第1回検定（2015年6月13日（土）実施、5月13日（水）申し込み）を受検することとし、2015年度前期に開講された共通教育科目の「文章表現Ⅰ」（1年次生前期以上）「文章読解Ⅱ」（2年次生前期以上）、「文章読解Ⅳ」（3年次生前期以上）において受検希望者を募った³。

今回はモニター的な実施のため、受検料ならびに検定内容を学習するための公式テキストの購入費用は大学側で負担した。学生には、受検案内を配布して各級の特徴やレベルなどを説明し、金銭的負担なく受検できることを述べた。

各科目の受講生（「文章表現Ⅰ」約430名（20クラス）、「文章読解Ⅱ」約70名（4クラス）、「文章読解Ⅳ」約30名（1クラス））に受検を呼びかけたところ、合計22名の希望者があった。内訳は、「文章表現Ⅰ」13名（すべて1年次生）、「文章読解Ⅱ」3名（2年次生）、「文章読解Ⅳ」5名（3年次生3名、4年次生2名）、前年度の2014年度後期開講の「文章読解Ⅲ」の受講生1名（3年次生）であった⁴。これを学年別に示したのが、表1である。

表1 受検希望者数(学年別)

学年 受検希望級	1年次	2年次	3年次	4年次	計
3級	0	1	0	0	1
準2級	8(3)	0	1	0	9(3)
2級	2	2	3	2	9
合計	10(3)	3	4	2	19(3)

単位：人

* ()内は受検を希望したが、日程が合わないなどの理由で受検を辞退した者。

これを見ると、受検希望者22名のうち、1年次生がほぼ6割を占めることがわかる。ただし、先にあげたように科目によって受講生数が異なるため、この結果から、検定への意欲が他の学年に比して1年次生で特に高いとは言いがたい。また、1年次生はほとんど準2級を希望し、2年次生以上はほぼ2級を希望するという傾向が見てとれる。

受検を希望しながら辞退した者が3名あったため、受検を申し込んだのは、3級1名、準2級9名、2級9名の19名であった。受検にあたっては、各級の公式テキストを配布し、各自で受検に備えるよう指示した⁵。

そして、2015年6月13日(土)、神戸学院大学ポートアイランドキャンパスにおいて、文章検を実施した。2名(準2級：1年次生1名、2級：3年次生1名)が欠席したため、実際の受検者は17名であった。

3. 受検結果の分析

受検結果は表2の通りで、各級の合格者は、3級なし、準2級8名(すべて1年次生)、2級2名(2年次生、3年次生各1名)のあわせて9名であった。

表2 検定結果

受検級	3級	準2級	2級	合計
受検者(名)	1	8	8	17
合格者(名)	0	7	2	9
合格率(%)	0	87.5	25.0	52.9

2級の合格者は8名中2名であったが、準2級は8名中7名の学生が合格した。

各級の問題は選択式問題と記述式問題とからなる大問4～5問で、レベルが上がると記述問題の比率が高くなっている。以下、級ごとに結果を分析する。

3-1 3級の受検結果

3級の問題は、大問5問からなる。そのうち記述式問題は200点満点中の110点、55%を占める。

3級受検者は1名であるため、詳細な分析はおこなわない。参考までに受検結果について

てふれておくと、全体の35%（70点）を占める大問5の論説文を書く問題が無得点であった。文章検では、記述問題に行数の指定があり、行数不足または超過の場合は採点の対象とならない。行数超過は考えにくく、恐らくは時間不足のために十分な解答ができず無得点となったのではないかと推測される。

3-2 準2級の受検結果

準2級の大問数・記述問題の比率は3級と同様で、大問5問、記述問題は200点中の110点、全体の55%であった。

準2級は、今回の受検級の中では合格率がもっとも高く、1名をのぞきすべて合格し、合格率は約9割であった。受検者の平均得点は146点、合格者のみに限れば平均点は150.4点であった。合格者のうち8割以上の高得点を獲得した者が2名あった。

なお、不合格の1名の結果を見ると、70点を占める第5問の記述問題が無得点であった。第4問までは検定合格者の平均点かそれ以上得点していることからすると、先の3級受検者と同様、恐らくは時間配分に失敗し、最後の問題に取り組む時間がなかったのではないかと推察される。

問題の内容と配点、及び受検者の設問別の平均点（表3）を次に示す。

〈準2級 問題の内容〉

第1問	語彙・文法	配点30点（選択問題）
語彙	問1-1, 2, 3	各5点
文法	問2-1, 2, 3	各5点
第2問	図表の読み取り	配点30点（選択問題）
問1, 問2, 問3		各10点
第3問	文章の読み取り	配点30点（選択問題）
問1, 問2, 問3		各10点
第4問	手紙文の修正・作成	配点40点（記述問題）
問1	誤りの訂正	各5点
1	誤字	2 敬語
		3 語句
問2	手紙文の作成	25点
第5問	論説文の作成	配点70点（記述問題）

表3 準2級 設問別得点

	本学受検者	全国の大学生・一般 (19歳以上)	全国の合格者
第1問-1	6.3	7.9	8.2
-2	15.0	14.7	14.6
第2問	26.3	26.6	26.5
第3問	26.3	24.1	25.0
第4問-1	11.9	9.5	9.7
-2	18.0	18.2	19.7
第5問	42.4	45.1	54.7

*「第1問-1」は、「第1問 問1」を示す。以下、同様。

これを見ると、本学の受検者8名は、第1問-1の語彙を問う問題を除いては、選択問題・記述問題の別なく19歳以上の受検者と同等か、それ以上の点を得ており、特に第3問「文章の読み取り」及び第4問-1「手紙文の知識」を問う問題においては、合格者平均をも上回っていることがわかる。

第1問-1は、19歳以上の受検者の約8割、合格者平均の約4分の3の得点となっており、他の設問に比して得点が低かった。これは、「大同小異」「少壯気鋭」「気がおけない」という四字熟語・慣用句の正しい用法を選ぶ問題であった。本学の受検者は、こうした語彙についての知識が不足していることが指摘できる。

また、第5問「論説文の作成」の平均点は、19歳以上の受検者の94%ではあるものの、合格者平均の8割にも達しておらず、配点70点中の6割に過ぎない。この箇所が無得点であった者がいることも考慮し、試みに無得点の1名を除いた7名の平均を出してみると48.4点となり、19歳以上受検者の平均点は上回るものの、合格者平均の約9割である。すると、本学の8名の受検者は、論説文の作成能力が若干不足しているといえる。

3-3 2級の受検結果

2級の大問数は4問で、記述問題の配点は160点、全体の80%であった。

前掲のごとく、2級受検者8名のうち2名が合格した。受検者の平均得点は122点、合格者の平均点は151点、不合格者の平均点は112点であった。不合格者7名のうち130点台が1名、110点台が2名、100点台が3名であった。総得点が6割に届かない学生が5名おり、このうちの3名は記述問題である第3問、第4問のいずれかが無得点である。このことからすると、これら3名も3級・準2級の不合格者と同様、恐らくは時間配分の失敗により、記述問題に十分な解答ができなかった可能性が考えられる。

問題の内容と配点、及び受検者の設問別の平均点(表4)を以下に示す。

〈2級 問題の内容〉

第1問 レポートの構成

配点30点(選択問題)

問1 - 1, 2	各5点
問2 - 1, 2	各10点
第2問 要約文の完成	配点40点
問1	10点 (選択問題)
問2	30点 (記述問題)
第3問 手紙文の作成	配点50点 (記述問題)
第4問 論説文の作成	配点80点 (記述問題)

表4 2級 設問別平均点

	本学受検者	全国の大学生・一般 (19歳以上)	全国の合格者
第1問	27.5	27.8	29.2
第2問 - 1	6.3	7.4	8.5
- 2	22.6	23.6	24.8
第3問	28.9	32.7	38.3
第4問	36.8	40.9	54.2

単位：点

これを見ると、受検者の平均点は、第1問が19歳以上の平均点とほぼ同じであるほかは、すべてそれより低くなっている。

ことに第3問・第4問は配点中の6割に達しておらず、第4問にいたっては半分にも満たない点数となっている。前節と同様に無得点者を除いた平均を出すと、第3問が38.5点、第4問が42点となる。すると、第3問は合格者平均とほぼ同じとなるが、第4問に関しては配点の半分強で、19歳以上の受検者の平均は超えるものの、合格者平均の約8割にとどまっている。

第3問、4問ともに記述式で、与えられた条件に添って手紙または論説文を作成するという問題である。第3問は頭語・結語など手紙文を書く際の知識も必要であり、それに加えて文書の目的にあわせ、必要な情報を過不足なく盛り込んだ内容を書く、といったものであった。一方、第4問は考えのヒントとなる文章があげられ、それを読んでテーマについての予備知識を得たうえで、与えられたテーマ「特典付き商品を、特典目当てで複数買うことの是非」について論説文を作成する、というものである。第3問、第4問ともに手紙文や論説文をただ書けばよいのではなく、与えられた条件にあわせて情報をまとめて文章を作成しなければならず、難易度が高いものといえる。

この結果から、本学の受検者9名には、手紙文・論説文を書く能力だけでなく、必要な情報を判断し、それを適切に盛り込んだ文章を書く能力が不足していると判断される。

3-4 検定受検結果のまとめ

各級の結果の分析により、本学の受検者は、語彙力ならびに論説文を作成する力が不足していることが明らかになった。したがって、授業においてはこうした力を養成するような取り組みが必要であるといえよう。

4. アンケート結果の分析

検定実施後、合否結果が発表される前に無記名のアンケートを実施し、受検者17名のうち15名より回答を得た。

受検級の難易度と解答に要した時間について尋ねたところ、3分の1の5名が「ちょうどよかった」と答え、残りの3分の2は「やや難しかった」と答えた。時間については「時間があまった」「ちょうどよかった」が各1名、「やや不足がみ」が11名、「かなり不足した」が2名であった。「とても難しかった」と答えた学生はいなかったことから、受検級は適正だったと考えられる。

時間については、不足がみだと感じた学生が9割近くであることから、多くの学生が時間内に解答することに困難を感じていたようである。無得点の大問があったのは受検者19名中の約3割（5名）であるが、そのほかの学生も時間が足りないと感じており、時間配分がうまくいかずに実力を発揮しきれなかった学生がいる可能性がある⁶。受検にあたっては、時間配分に留意するように事前に注意を促す必要があろう。

受検理由（複数回答可）については、「自分の実力を知りたかった」「今後の自分にプラスになる」が9名、「自分の将来や就職活動に役立つ」と答えた者が7名、「無料だったから」が7名、「検定の内容に興味がある」「大学での学習に役立つ」が各2名であった。

受検者は、自分の実力を把握し、今後の自分に役立てようと受検したようである。実際、検定受検前に「検定の認定を受けると就職活動に有利か」との質問が数名の学生からあったように、学生は検定と就職活動との関わりを意識していたことがうかがわれる。加えて、費用負担がないことも受検の動機となったと判断される。

受検の感想については、「感想なし」と答えた1名を除く14名が「とてもよかった」「よかった」と答えており、アンケート回答者の9割以上が満足しているといえる。その理由として、受検動機である「現在の実力を把握できたこと」をあげたのは6名であった。そのほか、検定で問われる項目（四字熟語や手紙文の作成、自分の意見を表現することなど）を学んだことをあげたのが4名であった。検定受検が四字熟語や手紙文などの学習のきっかけになったことがうかがわれる。

「次回も受検したいか」という問いに対しては、「受検しない」と答えた者はおらず、7名が「時期が近づいてから考える」として態度を保留していたものの、残りの8名は「受検したい」と答えた。そのうち3名が、次に受検するときにはより上級の受検を希望している。受検者の半数以上が検定への意欲を示しているといえる。

今回は試験的な実施という前提で大学側で受検費用を負担したため、受検者に費用負担は生じなかったが、今後の参考としてアンケートでは費用負担についても尋ねた。

費用負担可能額は、4,000円以上と答えた者はおらず、もっとも多かったのが1,000円以内と2,000円～3,000円の各6名で、計12名であった。無料のみ可とした者もなかったため、学生は、ある程度の額なら負担してもよいと考えていることがわかる。受検者に費用負担を求める場合、1,000円以内と2,000円～3,000円が同数で、合わせて受検者の8割となっていることから、このあたりが負担額の目安となろう。

実際の受検料は、3級と準2級が3,000円、2級が4,000円であることを考慮すれば、

より多くの学生に受検を促すには、今回のように大学側が受検料を負担するか、受検者に費用負担を求めるとしても、受検料全額でなく、たとえば1,000円までとし、残りの金額は大学が補助するといった、何らかの措置が必要と思われる。

また、文章検以外の検定（たとえば「日本語検定」など）の受検希望についても聞くと、「無料なら」が7名、「日程が合えば」が6名、「支出可能な金額なら可」が2名であり、「受けたくない」と答えた者はいなかった。

学生は、費用と日程があれば受検を希望するようであり、可能ならば費用負担がないのがよいと考えているようである。

5. おわりに

以上、学生の能力を把握するための客観的な指標として活用するために文章検を受検した。各級の結果を分析したところ、どういった能力が不足しているかなど、本学受検者の能力をある程度把握することができた。また、受検者へのアンケートにより、検定受検のために四字熟語を学習するなど、授業外での学習への動機づけとなっていることも判明した。

本稿で分析した、検定の各級で問われる内容と、筆者が担当している「文章表現」「文章読解」で学ぶ内容とでは、以下のように関連が見られる。

語彙（四字熟語・慣用句）（3級・準2級）	……「文章読解」
敬語（準2級）	……「文章表現」「文章読解」
図表の読み取り（3級・準2級）	……「文章読解」
文章の読み取り（3級・準2級）	……「文章読解」
手紙文の作成（3級・準2級・2級）	……「文章表現」
レポートの構成（2級）	……「文章表現」「文章読解」
レポート（論説文）の作成（準2級・2級）	……「文章表現」

たとえば、四字熟語は「文章読解」で取り上げるが、3-2でみたようにこの分野の得点が低かったことから、授業においては、こうした語彙を習得するための方策を講じる必要があると考えられる。

手紙文に関しては、検定実施後に「文章表現Ⅰ」の授業で学習した。検定受検者は、その授業後に、「手紙文は検定受検のために学習していたので、授業内容がより深く理解できた」と感想を述べていた。検定受検のための学習が、大学の授業でも活かされたことに手応えを感じていたことがうかがわれる。

検定合格を目的に授業をおこなうのではないが、授業での学習と検定内容との関連を示唆することにより、学生の学習意欲を高め、学習内容の達成度を高めることも可能ではないかと思われる。

今回は文章検を実施したが、学生は日程が合い、費用の負担が見合えば他の検定の受検も希望することが判明した。そこで、日本語能力を測定する他の検定（「日本語検定」など）も実施して同様の分析をしたいと考えている。異なる検定を受けてその結果を分析すれば、別の側面から本学の学生の能力を測ることができるとと思われる。複数の検定結果から、本

学の学生に不足している能力を多角的に把握することで、基礎思考分野の科目である「文章表現」「文章読解」において、そうした能力を育成するための効果的な指導がおこなえるのではないかと考える。

注

- 1 学生の能力把握および能力育成のための指標として文章検を用いた実践報告として、野々村（2015）がある。
- 2 文章検の概要は、文章検公式ホームページ(<http://www.kanken.or.jp/bunshoken>)を参照した。同ホームページによると、「基礎力」は日本語の基礎的な言語知識と運用能力、「読解力」は文章や資料を読解する能力、「作成力」は文章を作成するための思考力と表現力を指す。
- 3 「文章表現Ⅱ」、「文章読解Ⅰ（Ⅲ・Ⅴ）」は後期の開講科目であるので、今回は受検対象とならなかった。
- 4 2014年度後期開講の「文章読解Ⅰ・Ⅲ」で、次年度に文章検を受検することを予告していた。そこで、前年度の当該科目受講生に文章検の案内をしたところ、受検を希望した学生である。
- 5 受検を希望したものの、検定日に授業があるなどの理由で受検できなかった者には、検定受検への意欲を考慮し、テキストを無償で配布し、自学自習するよう促した。
- 6 無得点の原因としては、もともと記述問題に取り組む意志がなく解答しなかったとも推される。ただし、「時間が不足した」と感じた学生が多数いることから、時間配分の失敗によって解答時間が不足し、結果として不十分な解答となったことを無得点の第一の原因としてあげておきたい。

参考文献

- [1] 野々村 憲, (2015), 「文章読解・作成力の実態把握と能力育成へ向けた授業実践－文章読解・作成能力検定の分析と考察をもとに－」, 『広島文化学園大学学芸学部紀要』, 5,49-53